
藍戦士

曇のち晴れ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍戦士

【Nコード】

N4480H

【作者名】

曇のち晴れ

【あらすじ】

俺TUEEEな主人公カイトが次に渡った世界、それはゼロの使い魔の世界だった。

設定

タイトル 藍戦士

世界 ゼロの使い魔

主人公 カイン

種族 吸血鬼 真祖

♂

1億飛んで25歳(世界を渡り歩いていた結果この年齢になった。
小暮閣下の先輩>w<b

くスタイルく

黒髪

左目赤

右目金

肌白

身長187 سانت ゼロ魔ではcm= سانت

予定

イザベラ愛 タバサ 愛?

く戦闘力く

筋力S+

魔力SSS

魔眼SSS++

対魔S (A以下は自動でキャンセル)

対物A (突っ込みは必ず当たる)

幸運B (所詮人並み)

基本俺TUEEEEEEEEEEEEEな感じ

く魔眼く

魅了

直死

浄眼

石化

呪殺

邪眼

狂気

妖精眼
グラムサイト

事象の瞳
ハヤトロギア

複写眼
アルファ・ステイグマ

ミクルアイ改めレインアイ

そのうち追加

く魔力回路く

メイン1億

サブ7千

く固有結界く

1st 時と生命を止める程度の能力（ザ ワールド）

2nd 生命の還る場所

2つの固有結界を合成して1つの固有結界とする。

1は単独での発動可 2は1が発動しない限りできない

2に関しては作品にてのちのち説明予定

反則的な魔法

く主な魔法く

ネギま

闇・氷・光

発動キ―

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

F a t eより

宝石の翁の使用できる第2魔法から派生

平行世界・異世界転移、蘇生、時空間移動

宝具

アヴェンジャー＆アンリマユ（F a t eの平行世界より聖杯の中の
アンリマユとそれに犯されたシロウを屈服させ魂のみを抜き取り剣
へと具現化させたもの。アヴェンジャリマユ剣と鎧

くその他能力く

思いつきで追加予定

今まで渡った世界

F a t e

月姫

ジョジョ

ハンターハンター

Gガンダム

東方

我々の世界

ブローグ

ブローグ

とある喫茶店

「はぁ・・・そろそろ移動したほうがいいなぁ・・・」

モニターの前に座っていた男が呟いた。

「ここは前いたところより過ごしやすいくけど平和すぎだなー。つまらん。」

男は周りを見渡した。

そこには沢山の個室と本棚そしてドリンクバーなど様々な物があつた。

そしてそこにはただ何もやることを見出せていない抜け殻のような人たちが居た。

「ネカフェって便利だなー。漫画あるし、ネットできるし、暮らせるし・・・」

と言いつつトイレに向かった。

トイレの個室に入った男はさっきまで読んでいた小説を取り出した。

「ふむ、今度はここに行ってみるかな・・・」

そう呟くと男はブツブツ何か呟き始めた。次の瞬間男は眩い光に包まれた。

とある庭にて

「さあ、私にふさわしいこの大宇宙に存在せし数多の星屑に生ける可憐で優雅で最も気高い私だけの使い魔よ、私の前に降り立ち姿を現しなさい。」

蒼い髪の少女がそう叫ぶと辺りが光に包まれた。その様子を見ていた周りの連中はその光に目をやられ俯いていた。

中には「目があ目があ」と叫ぶ物も居たようだが少女には聞こえていなかったようだ。

次第に光が弱まり少女は光の中を確認した。

「（。A）ポカーン」

少女は驚きのあまり固まってしまった。

そこには黒髪で片目は赤もう片方は金そして見たことの無い服装の

男がいた。

第1話 出会いはいつも突然に

第一話 出会いはいつも突然に

「（。Δ）ポカーン」

少女は呆然としていた。少女は自分自身は優秀ではないと知っていた。だからそれほど期待もしていなかったしどんな者が現れようとそれを認めるつもりだった。しかし出てきた者は彼女の予想を遥かに凌駕していた。一般的にこの儀式で呼ばれる者は犬であったり猫であったり、優秀な者でもドラゴンといった幻想種なのだ。少女は思った、自分は神に見放されているのだと。

そんな事を思っていると周りの護衛が男を取り囲んで警戒し始めた。少女はそれを止めさせようと口を開こうとした。しかしその口から静止の言葉は出なかった。なぜならその時、不自然な風が吹いたかと思うと男を取り囲んでいた自分の護衛が次々に倒れたのだ。そして男の目を見たとき今まで感じたことの無い恐怖を感じた。

「お、おまえ・・・なにを・・・した・・・？」

少女は脅えながら言った。

「ん？いや、少し脅したただだよ。少しね。」

男は軽い口調で答えた。

「そんなことより、ここに俺を呼んだのは君かい？」

「ええ・・・そうだ！私がおまえを呼んだんだよ！だから私に従え！」

さっきの気持ちを打ち消す様に少女は強く言葉を発した

「ふむ、その前に2、3聞きたいことがある。ハルケギニア・ロマリア・レコンキスタ、この中に聞き覚えのある単語はあるかい？」

「はあ？おまえは何言ってるんだい。ここはハルケギニアで、ロマリアは国だ。最後のレンコン・・・は知らないが。そんなこと平民の子供だって知ってるぞ。おまえは馬鹿か？」

「ふむふむ・・・移動中何かに引つ張られてここに来たが世界は合
つてる様だな・・・で、君の名前は？」

「さつきから質問ばかりだね。まあいい。私はガリア王国皇女イザ
ベラ様さ！お前のような者が気安く口を利いていい相手じゃないん
だよ！」

「ほお、というところはプチトロワか・・・ふむ。」
そう言うなり男は考えだした

「さあ何呆けてるんだい！早く屈みな！」

イザベラはそう言うと言の脛に蹴りを入れた。

「はいはい。どうなつても知らないぞ？」

男はニヤニヤしながら彼女も言うとおりに屈んだ。彼女は不機嫌にな
りながら呪文を唱えた

「我が名は（略）」

そしてキスをした。唇を離そうとしたとき男の手が彼女の後頭部に
回り顔を離せなくなつたかと思うと男が彼女の唇に自分の舌を進入
させ始めた。彼女は最初抵抗していた。だが次第に体に力が入らな
くなつていき、その行為に快感を感じ始めていった。キスをしてか
ら5分かそこらで男は彼女の唇を強めに噛んだ、それも血が出るく
らい。それが引き金になり彼女は昇天してしまった。そんな彼女を
見て満足したのか男は唇を離れた。彼女は息が荒く、目がトロンと
して焦点が合っていないようだ。

「ふむ。やはり見た目どおりいい女だな。」

そんな彼の言葉を聴いたイザベラは次第に正常な精神を取り戻し顔
を真っ赤にした

「だが、その性格はいただけじゃないな。やはりジョゼフのせいか・・・」

「父上のせいだ！？そんなはずはない！すべては七号のせいだ！」
イザベラは男を睨んだ。そして彼女は思った。お前に何が分かるの
だ、と。

そんな思考を読んでか男は

「そんなに睨むな。君の事情は分かっている。だがな、君も分かっているはずだぞ。あのジョゼフが元凶であると……。それに従妹を恨む気持ちも分かるがその切欠を作ったのもお前の父……。いや、お前の父を操ろうとする輩だ。そんな輩の思惑に君は乗せられているのだよ。まあ君の父はわざとそれに乗っているんだがな……」

そういつて彼は彼女の目を見た。そこには戸惑いと憤りの色があつた。

「なら君に真実を見せてやろう。」

そういつと男はイザベラの腰に手を回した。すると今まで庭だった場所が見覚えのある部屋へと変わった。

「え……。ここは……。王宮の謁見の間……。？それに……。あの方は……。伯父様！？えっなんで？えっ？」

イザベラは突然のことに慌てていた。そのそのはず、今居るのは貴族や王族での一部しか入れない部屋なのだ。そしてそこには既に亡くなっている筈のオルレアン公と前王、そして父ジョゼフがそこにはいたのだ。

第2話 過去。そしてこれからに

「え・・・ここは・・・王宮の謁見の間・・・？それに・・・あの方は・・・伯父様！？えっなんで？えっ？」

「静かに。今は前で起きていることだけを見るんだ。」

イザベラはその言葉どおり静かに前の様子を見ていた

前王が玉座から立ち上がった。そして2人の前に立ち威厳を持ち言葉を発した

「次期ガリア王国国王としてジョゼフお前を指名する。2人とも異論はないな？」

シャルルはその発言が予想通りだったのかにこやかだった。

しかしその発言が予想外だったジョゼフは王に講義した。

「待つてください父上！なぜこの私が次期国王に・・・王ならばシャルルの方が相応しい筈！」

「兄さん。そんなことはないよ。兄さんは僕とは違い王としての氣質があるんだ。それを父上は見抜いていたんだよ。」

シャルルは心から祝福をこめさらにこう言った

「おめでとう。兄さん。」

そして2人は部屋から出て行った

「へえ。お父様はこうして王になられたのね。ところでここを見せようとするつもりなんだい？真実とやらはどうしたんだい。」

「まあ待て。ここからが君に見せたいところだから。さあ取り合えず見せたいものがあるからまた飛ぶよ。」

すると周りがまた変わった今度は見たことのない林だった。だがそこには見知った人物がいた。そしてその人物はまた見知った人物へ

弓を放ったのだ。彼女はそれを見て固まった。そこに居たのは彼女の父ジョゼフと叔父シャルルだ。そして弓を放ったのは父ジョゼフ当たったのは叔父シャルルだった。そしてジョゼフは当たったことを知ると狂気じみた笑いを浮かべていた。

「彼は苦しんでいたのだよ。周りから弟と比べられ、母には次期王はシャルルだとまで言われていた。彼も彼なりに努力していたんだ。でも誰も彼の努力を認めようとはしなかった。皆結果ばかり。彼には味方なんて居なかったんだ。そして今回の次期王への指名。その時の今まで自分より優れていたはずの弟からの祝福。そして思ったんだろうね。そんな奴は消えればいいと。」

イザベラは俯いてしまっていた。

「さあ、顔を上げるんだ。まだ真実は続いているぞ。君は最後まで見る義務があるんだ。」

そういうとまた景色が変わった。今度は華やかな舞踏会のような。イザベラにはもう分かってしまった。この後何が起こるのか。そして誰がこんなことを企んだのかを。

そして予想通りシャルロットの母が毒入りワインを飲み倒れた。シャルロットは泣いていた。今では見ることの出来ない表情だった。そしてまた景色が変わった。そこはシャルロットの夫婦の寝室だった。そこで起きた光景にイザベラは言葉を失った。シャルロットの母の異常な行動に。

結果的にはシャルロットの母は生きていた。そして大事そうに抱きしめていた。人形タバサを。そしてこう人形に向かつて呟くのだ。

「あなたは何かあっても私が守ってみせるわ。『シャルロット』。」

母の意識が戻ったと聞いたのかシャルロットが寝室にやってきた。

「かあさま！大丈夫「私とシャルロットを狙ってきたのね！出て行きなさい！暗殺者め！！」・・・ッ！」

「かあさま私がシャルロットです！かあさま！私です！」

「消えなさい！この子だけは私が死んでもに守って見せるわ。この子は絶対に渡しません！」

そう言つて近くにある物をシャルロットめがけて投げ出した。

「かあさま！・・・かあさま！・・・うう・・・」

その様子を見てイザベラは唇を噛み締めて俯いた。こんな事があつた自分の従妹であるシャルロット。そしてこんな事にしてしまった自分の父ジョゼフ。そして彼女に辛く当たっていた自分。今思えばシャルロットが無表情になつたのもこの頃からだつた。イザベラは激しく自分の周りをそして自分を呪つた。

「さあ戻ろつか？」

「・・・。」コケン

景色が変わり最初に居たプチトロワの庭に戻つた

「どうだい？真実を知つた気分は。」

「・・・。」

「まあ、知らなければよかった。そうなのかもしれない。だが君にはこうして知つて欲しかつた。これから君が何をしていくのか、何をすべきなのか、俺に分からない。だが君はまだやり直せる。」

「・・・やり直す？」

「そう、少なくとも君ならできるそう思うよ。」

「そう・・・そうね！あの子の為に・・・私が頑張らないと！」

男はその様子を見て微笑んだ。

「うん。やっぱり君はいい女だ。お節介しがいがあるってもんだよ。」

「

「私は元々いい女なんだよ！まったく・・・／／／／／」
照れているのか顔が真っ赤だ。

「あ・・・あんた名前なんていうんだい？」

「ん？ああ言つてなかつたつけ。俺はカイン。そう呼んでくれ。」

「カイン・・・よし！カイン使い魔としてこれからも私のそばにいて私が間違つたらドンドン言つてくれないかい？」

するとカインが困つた表情になつた。

「んー。ドンドン言つてあげるけど、それ以前に俺使い魔じゃないぞ？」

「エツ？何言ってるんだい？呼んだときにキ・キスを・したじゃないか。」

「あー。あれ？あれなら俺、魔力叩き込んで術式壊したぞ？」

「はあ！？あんたそんな事できるのかい？」

「まあな。術に込めた魔力の5倍の魔力で破壊できたぞ？」

イザベラは呆れ顔になった。

「5倍！？まったくあんたは時間戻せるは術壊すわ・・・ほんとに人間かい？」

「いや俺人間じゃないし。吸血鬼だし。真祖だし。てか、俺と契約したらお前死んでるぞ？」

カインはさりと云った

「・・・は？吸血鬼だって？それに死んでるって・・・」

「俺、真祖っていう吸血鬼の王族みたいものなんだわ。で、俺その中でも始まりの吸血鬼なんだよねー。でさ、ここでだと俺、精霊よりランク高いんだわ。だからそんな奴と契約したら魔力枯渇で一発アウトだよ。」

イザベラはもう飽きて果ててしまった。こんな奴が精霊以上だと言うのだから。

「でもまあ、俺はイザベラにゾッコンだからお願いされなくても傍に居るよ。」

キュン

その言葉を聞いてまた顔が真っ赤になってしまった。

「たく・・あんたはほんとに物好きだねえ・・そんな事言われたら・・もう・・／／／／」

ギュ

イザベラは乙女モード全快でハグした。

カインはイザベラの変貌ぶりに驚いたが、可愛いからこのままでいいかな、と思い直した。

「まあ、取り合えず城に戻ろうか。イザベラ」

「！ー！そうね。戻りましょ。」

そついうとイザベラは体を離し今度は手を握って引っ張るようにして城へと歩いて行った。

第2話 過去。そしてこれからに（後書き）

どうだったでしょう？

これが私の処女作となりますので至らぬ点が多々あると思います
宜しければ指摘いただけると幸いです

即時修正していきたいと思います

では、今後ともよろしくお願いします

第3話 壊される壊れた齒車

「むにやむにや・・・フフフ・・・」

「うむ。とりあえず状況把握だな。うん。」

・・・昨日から振り返ってみるか。たしかイザベラが俺が召還されたお祝いだと言って宴を開いたんだよな。で、酒飲んで酔った俺は案内された部屋に行ってベットで寝たと。うん。普通じゃないか。

・・・チラ

うん、居るね。よし、叫ぶか」

スウ・・・

「なんでコイツが俺と一緒に・・・しかも裸で寝てるんだー！！！！！！」

第3話 壊される壊れた齒車

「よし、とりあえず話を聞いてやる。それから処罰を与えるぞ」
カイトが（^ω^）な顔をしてイザベラに言った。

「あ・・・あんたがあたしをベットに引きずり込んだんじゃないか！
たく、あんな事までしてそんな事言うのかい／＼／＼」

それに対しイザベラがなぜか顔を赤くして反論した。

「へ？俺が犯った・・・のか？」

「覚えてないのかい？はあ・・・昨日あたしがあん・・・カイトを部屋に運んでいって寝かせたら急にカイトがあたしを引きずり込んで腕でロックしたまま寝たじゃなか・・・しかもあたしが寝てから襲うなんて時間差攻撃にも程があるよ！」

「アー。そうか、俺凄いな。で、どうだった？」

「・・・／／／」

「そうか、俺、凄過ぎるな。」

「なに他人事のように言ってるんだい・・・はあ」

「まあそんなに気を落とすな。今日は起きて頑張るから」

「・・・ばか。／／／」

その様子を見たカイトは名案が浮かんだ。

「アーやべ。可愛いのは罪だな。と言いつてもう一度夜行くぞ。」

「は？ちょ、ちよつと待ちな！今からするのかい！？」

「だってこんなに可愛いお前が悪い。この時間からでもいいけど俺お前の事１日中離さなくなるぞ？」

「１日ってなん・・・だって／／／」

イザベラは言葉の意味がイマイチ分からなかった。だが言っている間に気が付いたようだ

「今夜も」とあるという事に。そしてこれが決定事項ということに。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・夜の方が・・・いい・・・。」

流石に１日中という言葉と明るい部屋でというのに負けたのかイザベラがそう答えた。

「フフフ・・・計画通り。」ニヤリ

カイトが密かにイザベラに見えない角度で某神気取り風に小声で呟いたのだったは聞こえていなかったようだ。

そしてその部屋から２人の姿が消えたのだった。

数秒後現れたのは、ニコニコしたカイトとまだ惚けているイザベラだった。

「さあ、ご飯でも食べに行こうか？イザベラ。それとももう一度行ってみる？」

「え／／／（ブンブン）・・・食事にしましょう。そうね。それ

「がいいわ。ええ。」

「そうか。じゃ案内してくれるかな？俺の可愛いお姫様？」

「ええ。案内するわ。ごしゅじんさ・・・カイト。」

「ふむ。そんなに気に入ったのかイザベラ。」ニヤニヤ

「そ・・・そんなんじゃないよ。／＼／＼さあ早く行くよ！」

2人は食事を取るため移動したのだった。

移動中ハツとしたようにイザベラはカイトに問いかけた。

「そっいえばカイト自分は吸血鬼だとか言ってたよね？」

「ああ、そうだ。どうした急に？」

「あらしたちが食べる食事で栄養・・・というかエネルギー？動力源？には変換されるのかい？」

「んーエネルギーとしての役割はほとんどないといっていいかな？でも味は分かる。だから俺には娯楽的な感じだよ。」

「フーン。じゃあエネルギーはどうするのさ？・・・血を・・・吸うのかい？」

「ああ、それも1つの手でもあるな。だが必ずしもそうしないといけない訳ではないんだよ。俺の場合人が消費し大気に発散された生命力や生物が知らぬ間に垂れ流す生命職、あと大気中のオド・・・魔力みたいなものかな？とかその他色々補給源があるから別に吸血しなくても問題ないし。というか、吸血鬼の大半は吸血＝食事じゃないんだよ。吸血によって完全服従の兵や眷属を作る・・・といった事の方が重視されるんだよ。つまり食事＜兵、眷属＞ってことかな？まあ吸血好きも居るが大抵身内を吸う奴か、人間に退治される奴かのどちらかしかないし。」

「へー。とりあえずエネルギーには困らないんだね。ん。着いたよ。」

ドアの前でイザベラが止まった。

「ああそうだ。先に入ってくれないかい？あたしは少し用事を済ませてくるよ。」

そっぴいとイザベラは別の所に少し小走りで行ってしまった。

カイトはとりあえず部屋に入る事にした。そして席に座ってイザベラを待っていた。

ボタン

肩で息をしているイザベラが入ってきた

「ハア・・ハア・・すぐに・・ハア・・食事が来るから・・少し・・待つてて。」

「おう。わかった。・・そんなに・・漏れそうだったのか？」

カイトは少し深刻そうにそう言った。

「何勘違いしてるんだい！！そんなじゃないよ！カイトの分の食事知らせてなかったから言いに行っただんだよ！」

「そうか。わざわざ行ってくれたところ有難いが・・・メイドに頼めば済んだんじゃないか？」

「あ。それもそうだねえ・・・」

「まあそんなこともあるさ。」

少ししょんぼりしつつ2人は食事を取り始めたのだった。

食事が終わり2人はテラスでお茶をしていた。そんな時カイトが突然

「さて、遊びに行くか。」

「え？急にどうしたんだい？というかどこにいくのさ？」

イザベラは素直に疑問をぶつけた。

「ん？着いてからのお楽しみだよ。」

「は？あたしも行くのかい？まあいいけどね。」

カイトが立ち上がりイザベラの横に立った。それを見てイザベラも立とうとした・・・が立てなかった。というより立つ前にお姫様抱っこされていた。

「さあ行きましょうか？お姫様？」

カイトがそういうと景色が変わった。イザベラが辺りを見回した。どうやらここは夜で誰かの部屋の中ようだ。ベットが膨らんでいてそこに部屋の主が居る事がわかった。カイトがイザベラを降ろし立たせた。そして部屋の主の元へ行くように目で促した。

部屋の主を見たたんイザベラの顔が暗くなった。

「そうかい。今からやり直しを始めるのかい。」

「まあうまくいくさ。そのために俺がいるんだから。」

その言葉を聞きイザベラは心を決め部屋の主を起こした。そして部屋の主が起き上がりイザベラが見えると目を見開いた。

「・・・なぜ・・・ここに？」

「おはよう。シャルロット。今日は話があつてきたんだ。聞いてくれないかい？」

イザベラが部屋の主、シャルロットに話しかけた。

第3話 壊される壊れた歯車（後書き）

更新遅れてしまい大変申し訳ないです

パスワード忘れてしまい書けませんでしたw

とりあえず即興で作ってみたのですがどうでしょうか？

ご感想やご指摘お待ちしてます

前回までに感想ご指摘頂いた方本当にありがとうございます

これからかなりの駄文になると思いますがよろしくおねがいします（オイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4480h/>

藍戦士

2010年10月11日05時07分発行